

2018年「胃と腸」賞は竹内学氏ら「食道表在癌における深達度診断からみたB2血管の意義」(53巻10号)が受賞

2019年9月18日(水)、東京の笹川記念会館で開かれた早期胃癌研究会の席にて、2018年「胃と腸」賞の授賞式が行われ、竹内学氏(長岡赤十字病院消化器内科)らが発表した「食道表在癌における深達度診断からみたB2血管の意義」(「胃と腸」53巻10号:1343-1352頁)が受賞した。

受賞者代表として竹内氏が紹介された。続いて、「胃と腸」編集委員長の松本主之氏(岩手医科大学医学部内科学講座消化器内科消化管分野)より祝辞とともに、賞状と楯が贈呈された。

「胃と腸」賞は、その年に「胃と腸」誌に掲載された論文の中から、特に消化管の形態診断学・治療の進歩と普及および病態解明に寄与した優れた研究であり、原則として原著形式の論文に対して贈られる。今回は対象論文185本について、「胃と腸」編集委員会で厳正な審査を行い、決定した。

今回の受賞論文は、竹内氏らが、日本食道学会拡大内視鏡分類のうち、診断精度が比較的低いとされるB2血管を呈する病変について検討したもの。まず、B2血管の領域性に着目し、その長径と深達度との相関を詳細に解析した。その結果、T1b-SM2癌におけるB2血管領域長径中央値は10mmであり、T1a-LPM癌(5mm)やT1a-MM/T1b-SM1癌(4mm)に比べて有意に大きかった。さらに、B2血管領域をB2血管のみで構成されるpure typeとB1血管が混在するmixed typeに分類した多施設検討を行い、pure typeにおいてT1b-SM2癌のB2血管領域長径はT1a-LPM癌やT1a-MM/T1b-SM1癌より有意に大きい結果であった。両検討より、B2血管による診断精度向上のためには、この領域性を加味した診断が有用である可能性が示されたと結論している。

受賞者挨拶で竹内氏は、「名誉ある「胃と腸」賞を受賞できたことを、光栄に思います。この賞をいただくにあたり、振り返りますと、とても一人の力では困難であったと実感しています。新潟大学消化器内科前教授の青柳豊先生、現教授の寺井崇二先生ならびにスタッフの皆さま方に支えていただき、厚く感謝申し上げます。特に第一病理の味岡洋一先生、ならびに新潟県立がんセンターの渡邊玄先生にはとてもお世話になりました。私は、大学院生として病理学は学んでいませんが、渡邊玄先生のところに夜な夜な押しかけ、遅い時間まで内視



▲ 2018年「胃と腸」賞を受賞した竹内学氏

鏡と病理の対比を含めた検討に付き合っていたいただいたことが、今の自分の糧になっていることは間違いありません。また当時、大学院生であった渡辺(森)ゆかり先生には、B2血管領域と深達度に関する研究の中心的役割を果たしていただき、感謝しております。私は卒後3年目に消化器内科に入局し、9年目までは大腸を専門にしておりました。そのとき、ちょうどESDがブームになりましたがどうしてもうまくいかず、佐久総合病院(現 佐久医療センター)の小山恒男先生に教わりに行きました。9か月間という短い間でしたが、その間に自分の興味は治療から診断学へと移っていきました。切除した標本を実体顕微鏡で詳細に観察し、病理組織を自ら見て、また内視鏡にフィードバックする光景に衝撃を受けたことは今でも忘れません。この経験が今の自分を築いてくれたことは、間違いのないと思っています。これまで培ってきた診断学を「胃と腸」や早期胃癌研究会に活かせるよう、今後も頑張っていきたいと思っています」と述べた。

その後、竹内氏から受賞論文のレビューがなされ、最後に改めて会場から称賛の拍手が送られ、授賞式は終了した。